

「一人じゃ生きていけないから」

今日は、私たちがとても大切にしている聖餐式の、その原点ともいえる聖書箇所を読んで参りたいと思います。キリスト教において聖餐式は、キリスト者になるための洗礼式と並んで最も大切な儀式・儀礼であります。聖餐式の形としては、イエス様のお身体を象徴するパンを頂き、また、イエス様の流された血を象徴するぶどう酒、あるいはぶどうジュースを頂いて、イエス様のことを私たちの身体と心にお迎えします。もっとも細かいことを言うと、このような聖餐式の考え方は、キリスト教の諸教派によって、色々と異なる部分があります。例えば、カトリック教会の場合、聖餐式で頂くパンとぶどう酒は、イエス様の身体と血を象徴するものではなく、イエス様の身体と血そのものであると捉えて、これらを口にします。専門用語で言いますと「実体変化説」という考え方で、神父が祈りによって聖なるものとしたパンとぶどう酒は、イエス様の身体と血に本質的に変化したと考えます。なので、私たちが行う聖餐式よりも、さらに神秘性が高く「聖体拝領」、つまり、「聖なる身体を慎んでお受けします」という表現をします。また、カトリック教会と古い昔に分かれた、東方教会、日本ではハリストス正教会と呼ばれる教派では、聖餐式において、パンとぶどう酒に与るのは、その日の礼拝出席者のみならず、すでに天に召された教会員も含めて、一人一人名前を読んで、配餐します。もちろん、召された方はそれを食べることはできませんが、「天にあって地にあって共に聖餐に与る」という意識が、とても強いのだと思わされます。ちなみに、私たち敦賀教会の聖餐式でも、牧師が読み上げる式文の中に、こんな一節があります。配餐する前のお祈りの部分ですね。「わたしたちは今、みもとで仕える聖徒たちと共に、御名を賛美致します」と。これも、実は、聖餐式というものが、ここに集まっている私たちだけの儀礼ではなくて、先に召された敬愛する方々と共に味わうものであることを示しています。

とまあ、聖餐式について、色々と説明をしていくと、大学の講義のように深く、広く、そして小難しくなってしまうので、今日は、そこまではしません。ただ、私たちが毎月ほぼ当たり前のようになっている聖餐式が持つ意味と深みを噛みしめて頂けると、きっと神様もお喜びなるだろうと思います。と言うわけで、前にも一度、礼拝説教で触れたことがあります「私たちにとって聖餐式とは」というテーマのもと、ルカによる福音書 22 章 15～22 節から、御言葉を聴いて参りましょう。

新共同訳聖書によりますと、今日の聖書箇所が含まれる記述の小見出しには「主の晩餐」と書か

れています。この「主の晩餐」が、私たちの聖餐式の原型ですね。そして、その「主の晩餐」が行われた日と言うのが、「過越の子羊を屠るべき除酵祭の日」と、今日の聖書箇所少し手前の7節のところに書かれています。「過越」とか「除酵祭」とか、あまりキリスト教の教会でも普段耳にしないかも知れません。簡単に言いますと、「過越」も「除酵祭」も、旧約聖書にある「出エジプト」に関連する言葉であります。モーセさんと言う指導者が、エジプトの王ファラオの弾圧に苦しむイスラエルの民を、エジプトから脱出させる時。神様は、大きな災いを用いて、これを援助しました。その災いは計10回あったのですが、最後の最も大きな災いの時に「子羊の血を玄関に塗っておくと、災いはその家を【過ぎ越す】」という神様の御約束によって、イスラエルの民は自らの家族を守りつつ、災いに侵されたエジプトの国を脱出する機会を得たとされています。また、その脱出の時には、モタモタしてられないから、急いで旅支度をして家を飛び出したわけですが、その際に、パンを作るのに必要な「酵母」、「イースト菌」ですね、これを持ち出すことができませんでした。なので、エジプト脱出後に、イスラエルの民は「酵母」のっていない、固いパンを食べることを余儀なくされました。この伝承を元に、出エジプトを記念するお祭り際には、あえて「酵母」を入れていないパンを食べることが定められ、そのお祭りの名前を「酵母を除く祭り」「除酵祭」と称したわけです。ちなみに、ややこしいですが、「除酵祭」は別名「過越祭」と言います。理由は、さっき説明した通りですね。

で、本題です。イエス様は、出エジプトに遡るイスラエルの民のお祭りに従って、「主の晩餐」を行われました。そして、そのイスラエルの伝統、つまりユダヤ教の伝統の中で、私たちキリスト教にとって大切な聖餐式の原型をお示しになったのです。ただ、詳しくその様子を見てみると、色々私たちの知っている聖餐式とは異なる部分が見受けられます。例えば、まず杯を取り上げて、これを回し飲みしてから、パンを取って使徒たちに分け与え、食事が終わったら、また杯を取り上げて、これを分け与えたようです。杯、パン、また杯という順番ですね。あと、2回目の杯の際には、裏切り者として有名なイスカリオテのユダへの言及があります。私たちの聖餐式では、ユダのことに触れたりはありません。

なので、何度も言うように、「主の晩餐」とは、あくまで私たちの聖餐式の原型であり、それがそのまま現代に受け継がれているわけではないということです。私たちの聖餐式も、この聖書が書き終えられて以降の、様々な神学思想や社会的状況の変化に応じて、形を変えてきました。「主の晩餐」において、その杯を満たしていたのは、ぶどう酒でしたが、今、私たちが頂いているのはぶど

うジュースです。また、日本にキリスト教が流入して間もない頃は、西洋のパンやぶどう酒など手に入るはずもなく、お餅と日本酒で聖餐式を執り行ったという記録もあります。さらに言うと、カトリック教会における聖餐式で用いられるパンは、パンと言うよりせんべいのような食感のものです。ただ、それは酵母を入れていないパンに近い食感なのかも知れません。

このようにして「主の晩餐」に遡る聖餐式が、歴史の中で、また教派によって様々に変化してきました。しかし、その変化が多様で、柔軟である分、余計に強調され、浮かび上がる聖餐式の本質があります。それは、「やり方、形、流儀はどうであれ、私はイエス様と一緒にいたんだ」という願いですね。それが、聖餐式が持つ最も大切で、最も温かい意義であると、私は思います。

実は、今日の聖書箇所が伝える「主の晩餐」の主要なメッセージは、聖餐式のやり方ではありません。そうではなくて「これがイエス様との【最後の晩餐】なんですよ」という悲しい報せであります。レオナルドダヴィンチが書いた絵画のタイトルそのままですね。この【最後の晩餐】において、イエス様は「神の国で過越が成し遂げられるまで」、つまり全ての人が救われるという本当の意味での「過越」が成し遂げられるまで、「わたしは決してこの過越の食事をとることはない」と言って、将来実現するその時まで、ともに食卓を囲むことはないと言われました。そして、「神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作られたものを飲むことは決してない」と言って、これもまた、将来実現する時まで、ともに杯を交わすことはないと言われました。ようするに、これらの御言葉は、イエス様による決別の宣言なわけですね。もちろん、未来永劫ではなく、「その時」が来るまで、という期限付きのお別れです。

しかし、問題なのは「その時」がいつ来るのかを、私たちは知りません。だから、イエス様は私たちが不安で迷ったりしないように、心配になって別の道に進んだりしないように、「わたしの記念としてこのように行いなさい」といって、信仰を思い出す方法を伝授してくださり、「わたしの血による新しい契約である」といって、「また戻ってくるから大丈夫」という約束を新たに交わしてくださったのです。そして、私たちは、それを毎月毎月繰り返して、信仰を思い出し、約束を結び直し、日々、主の道を歩んでいるわけですね。だから、さっき言った聖餐式の意義に戻りますけど、だから「やり方、形、流儀はどうであれ、私はイエス様と一緒にいたんだ」という願いが、私たちが頂くパンとぶどうジュースには込められているのです。

・・・と、ここで説教を終えてもいいですし、終えたいところなのですが、でも、やっぱり触れないといけない 21 節と 22 節。「しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に

置いている。人の子は、定められたとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ」。これぞ、レオナルドダヴィンチが切り取り、描いた『最後の晚餐』の場面ですね。「主の晚餐」と「ユダの裏切り」は切っても切り離せない。これもまた、話し出すと長いのですが、4つある福音書の内、ヨハネによる福音書を除く、3つでは、どうもユダは、この「主の晚餐」に最後まで参加していたようです。つまり、裏切りという結果は変わらないけれど、ユダもイエス様によって祝福され聖別されたパンと杯を頂いていたということです。この辺りの聖書的推察を、どのように分析し、評価するのか。・・・「主の晚餐」に与りながら、なお裏切ったユダを私たちの信仰における反面教師とすべきなのか。あるいは全てを知って、なおユダにもパンと杯を分け与えたイエス様の御心に思いを馳せるべきなのか。あるいは、ユダの裏切りをも用いて御計画を成就される神様の御旨を尋ね求めるべきなのか……。個人的には、全部、大切なことだと思います。神様やイエス様を裏切るのは良くないことだし、でも、その裏切りに気付きつつ祝福を遠ざけない愛と慈しみを知るのも大切だし、そして、私たちの目から見て好ましくないことさえ御計画に組み込まれる神様を仰ぎ見ることも重要だと思います。

私たちは、「一人では生きていけないから」。イエス様の愛と、神様の御心に頼り、委ねながら。良いことを成した時も、悪いことを犯した時も。「主と共にいたいんだ」という祈りを忘れずに、信仰の歩みを続けて参りたいと願うものであります。お祈りを致します。

神様。

今日もこうして私たちを、あなたを礼拝するひと時に招いてくださり、感謝致します。あなたの御子イエス・キリストは、その最後の晚餐において、弟子たちに、そして私たちに大切なことを教えてくださいました。形はどうであれ、流儀はどうであれ、聖餐式のパンと杯を受けることで、私たちはいつも、天上の友と一緒に、主に相まみえることができ、信仰と約束を新たにすることができます。不安も多く、誘惑も多い、日々の生活の中で、聖餐の恵みに与れる幸いを感謝します。月毎に新たにされる救いの約束を信じて、私たちが胸を張って主の道を歩み通すことができますように。どうか、一人ではどうにも心許ない私たちの信仰を支え、力強く導いてください。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。